

栗子山塊の沢

栗子山塊の沢のうち阿武隈川水系の摺上川流域に属する部分について、1987年7月に「摺上川源流を訪ねて」と題して自費出版した。栗子山塊の沢は、その大部分が摺上川流域に属しているが、一部は最上川水系の羽黒川流域に属している。羽黒川流域の沢についても、今後引き続き遡行調査を続けていく予定である。ここでは1987年に実施した2本の沢の遡行記録を紹介する。

合 沢 1987年10月3日

福島から車で米沢方面に向かう。西栗子トンネルを抜けると、すぐに出合う沢が合沢である。左岸の林道を少し入った所に車を置く。

国道13号線から合沢に降り立ち、さっそく遡行を開始する。最初は小滝が2つ。やがて川床はナメとなり、明るい沢が続く。ナメは10分以上もえんえんと続き、すばらしい景観である。平坦地なので、滝は出てこない。

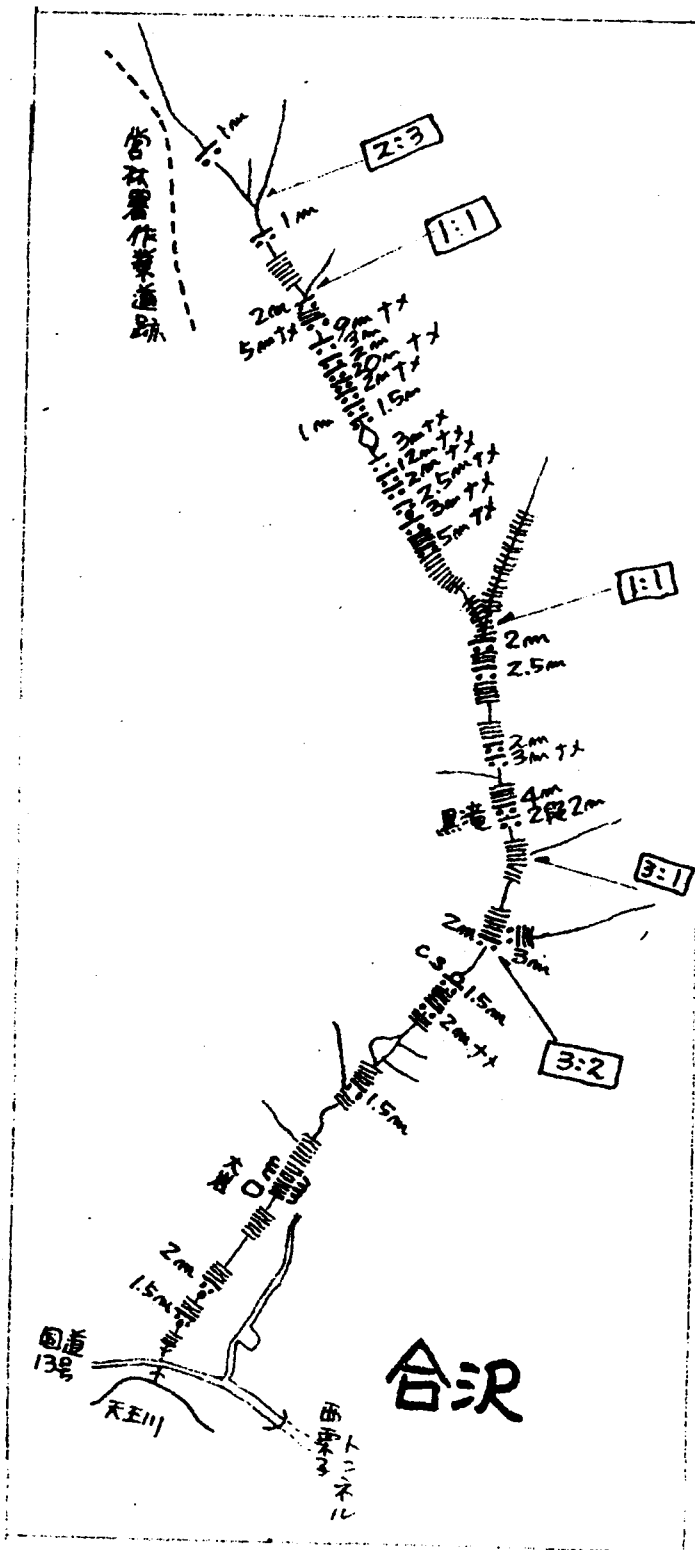
遡行を始めて約1時間で、ようやく滝らしい滝が出てきた。しかし高さは2m程。それを乗り越えようと、すぐに左岸から3mの滝をかけた枝沢が入る。ここまで来たのに、黒滝はまだ出てこない。もう出てきてよいころである。

小休止して再出発。断続するナメを快適に遡ってゆくと、「あった」。期待していた黒滝が、目の前に現れる。下部2段4m、上部4m程で、沢の大きさからいって、まあまあの滝である。左岸を直登することができる。

黒滝の上部はナメである。それも小滝と釜が連続した広々としたナメである。期待していたより美しい沢で、何か得をした気持である。

やがて二俣となる。左俣が本流だが、水量比は1:1。右俣の方は、えんえんとナメが続いているのが見える。美しい右俣に心をひかれながら、左俣に入る。

左俣に入ると、ナメがきれ、川原状となった。そのあと階段状のナメ滝となつて、いっきに突き上げている。私達は、あまりの壮観さに圧倒されてしまった。上部の20m程の階段状のナメ滝は、最初右岸から取り付き、中間でトラバースし



て、左岸を直登する。登りきった先にも2m, 3m, 9m, 5mと続き、ようやく平坦となった。いききに100m程の高度をかせいだことになる。

核心部はここまでで、あとは沢幅もせばまり、源頭の様相を見せる。上部の二俣で左に入り、やぶごぎ開始。2分足らずで、秋田営林局の境界見出し標のついている作業歩道跡に出て、遊行終了とする。

2時間半程度の行程であったが、当初期待していたより滝も多く、ナメの続く美しい沢であった。私達の身近なところに、まだこんなすばらしい所が存在していることが、大変うれしく、新鮮な気持ちになれた。

(記・

[タイム] 合沢出合(9:10)→黒滝(10:15)→遊行終了(11:35)